

地域・学校・企業が「今、ここ」でつながる会社体験活動

杉並区立天沼小学校 主任教諭 澤 祐一郎, 主任教諭 伊藤 友香, 主任教諭 向井 亮介
 キーワード：小学校, 5年生, 総合的な学習の時間, 地域連携, キャリア教育, 金融教育

実践の概要

本校では、第5学年の児童が株式会社を設立し、商品を製造、販売する「天沼会社経営プロジェクト（以下、AKP）」を毎年実施している。「働くって何？」という問いから始まり、会社の仕組みや組織について学ぶとともに、材料を発注し、商品を開発・製造・一般販売する。

1. 目的・目標

(1) 本実践の目的

本校では、AKPを過去12年間にわたり実施してきた。企業や地域などのサポートを受けながら、商品の開発・製造・市場調査・資金調達・販売など、子供たちによる本格的な会社体験活動を行う本実践。自分たちでつくった商品を実際に天沼地域で一般販売し、利益を得ることを目指す。年間を通して子供たち一人一人が「働くこと」の意味について、自分なりの答えを見いだすことが、本実践のねらいである。

(2) 令和2年度における課題と目標

令和2年度、AKPを実施する上で課題となったのが「感染症拡大防止対策」である。4、5月の休校措置に始まり、手洗いの徹底やマスク着用、給食時の私語厳禁など、本校でも学校生活の様々な場面において、感染症拡大防止に向けた対策を講じた。その中でAKPも、子供の手による商品製造の禁止や、地域の人々への市場調査・直接販売の禁止などの措置がとられた。活動の中心であった商品の製造や販売ができない中で、子供たちにどのように「本物の体験」を味わう機会を設けるか、実感を伴うキャリア教育を経験させられるか、計画段階で検討を重ねた（写真1）。

結果として、令和2年度のAKPでは、「今だから仕方ない」と後ろ向きに活動を考えるのではなく、「今だから



写真1 検討段階の令和2年度AKP全体像

こそできる！」と活動を前向きに進められるよう、AKPとしては初めて、企業と連携したHP立ち上げやPowerPointによる各協賛店舗のポスター作成など、宣伝部門での活動を充実させるよう提案した。同時に子供たちの話し合いも密集した状態にならないように、オンラインアプリを活用してミーティングをしたり、クラウドを活用してファイルを共有したりする手立てを講じた。その背景にあるのは、「GIGAスクール構想」である。AKPが子供たち一人一人にとって協働的な学びであるとともに個別最適な学びとなるよう、タブレット端末などのICT機器を最大限活用して、活動に取り組んだ。そして、商品の製造を外部企業に委託、販売を荻窪教会通り商店街の協力を得て店舗販売とし、感染症拡大防止対策の中でも活動が進められることとなった。

【本時の学習内容】	学習活動	子供活動	指導上の留意点
●指導目標/AKP活動のふり返りを通して、活動の成果と課題をまとめられるようにする。 ●評価/自分が天沼地域の一員として、地域のためにできたことを振り返り、今後地域のためにできることを考える。	本時の学習課題と学習の流れを確認する。	学習課題を確認し、学習の見通しを立てる。	本時がAKP活動の最後のまとめであることを意識させる。
【指導略案】 ●単元指導計画（全体時間36時間） (1)会社の仕組みを知り、商品を作ろう（10時間） (2)会社をつくって、活動を計画しよう（4時間） (3)各部門で活動しよう（15時間） (4)商品を販売しよう（5時間） (5)AKPのまとめ&ふり返りをしよう（2時間） ●本時の目標と展開 令和3年3月 児童数121名 ・1年間のAKP活動をふり返り、自分の成果と課題をまとめよう。	各部門から、年間の活動の成果と課題を報告する。	・宣伝部 ・商品開発部 ・会社役員 それぞれの成果と課題を報告する。	他の部門の成果と課題にも目を向けることで、活動全体を見通して振り返りができるようにする。
	活動全体を通して、個人の成果と課題を発表する。	活動を通して、自分ができるようになったことや改善点を振り返る。	各部門で児童一人一人の努力や頑張りを認められるような言葉掛けをする。
	「働くこと」について、個人で考えをまとめる。	「働くこと」について、学習当初とどのような違いがあるか振り返る。	キャリア教育の一環として、働くことに対する児童の意識の変容を見取る。

2. 実践内容と成果

2.1 実践の特長や工夫

AKP の中心にあるのは、子供たちが実際に社会で働く人々に触れ、ものづくりや会社経営について体験することである。キャリア教育の一環として、中学・高等学校において AKP と同様の活動事例を目にすることはある。しかし小学校段階で企業や地域と連携することによって、継続的に活動を実施している事例はほとんど見られない。

また子供たちが HP 作成 (写真 2) したり、タブレットでポスター作成したりしながら、商品の売り上げを高めるために試行錯誤することに本実践の価値があると考えられる。



写真2 完成したHPをプレゼンする場面

2.2 <品評会でのプレゼンテーション>

「商品開発」では、一人一人が商品アイデアを考え、グループを組み、PowerPoint やロイロノートなどの発表ソフトで商品のプレゼンテーションを作成した。審査員であるゲストティーチャー (建築士、町会長など計 9 名) が評価し、商品の候補を絞っていくのが「品評会」(写真 3) である。審査員と子供たちの投票の結果、「紙石鹸」、「エコバッグ」、「カレンダー」が候補として選出された。



写真3 第1回品評会の様子

2.3 <オンラインによる選挙演説、情報共有>

会社設立に先立ち、社長と副社長を募集した。感染症拡大防止のため、候補者と投票する子供たちが直接向かい合わないよう、演説はオンラインで各教室をつないだ (写真 4)。同時に他の子供たちも「開発部」か「宣伝部」かの希望を取り、所属する部署が決定した。これ以降、各部署の情報共有はオンラインアプリを活用して実施した。



写真4 立候補者の演説(オンライン)の様子

2.4 <宣伝物の作成>

宣伝部広報課では、販売期間中、商店街の有線放送で商品宣伝を流す放送原稿や放送音源 (CD) を作成した。宣伝物課では、デジタル関係の派遣事業を行う方々をゲストティーチャーとして全 3 回のワークショップを実施し、販売場所である商店街の各協賛店舗のポスター (写真 5) を作成した。インターネット課でも、上述した企業の方々の指導のもと、会社の HP を作成した。子供たちは夢中になって HP 作成に取り組み、中でもタブレット端末の翻訳機能を活用して、HP 内の記事全てに英語訳を付けたことには子供の柔軟な発想に驚いた。また子供たちからのアイデアで、本校 HP にも会社 HP のリンクを貼って、視聴数を伸ばす工夫が提案・導入された。



写真5 作成したポスター / 写真6 AKP商品「エコバッグ」

3. 今後に向けて

商品 (写真 6) 開発や宣伝など、子供たちは一人一人が主体的に取り組み、様々な人やものと協働的に活動した。キャリア教育の一環として、天沼地域に生きる一員として、問題が発生しても根気強く取り組み、「働くこととは？」に対する答えを見いだした。現代社会において、相手と顔を合わさずに売買が成立する場面は多々ある。だが、それだけでは人と人の「つながり」は感じられない。「地域」をキーワードにした本実践を通して、顔と顔を合わせることがいかに大切になることができたのではないだろうか。今後、予測不可能な社会の中でも、ICT 機器を最大限活用し、協働的に自分の思いや考えを実現できる子供たちを育てていきたい。